

# 徘徊なんて怖くない—その2

「行きません宣言」をしたTさんを説得し切れずにいる私を見かねて、最後に決めてくれるのがKさんでした。たった一言「行くぞ！」

で、押し問答に終止符が打たれました。こんなことがあるたびに、私とKさんの違いはどこにあるのだろうと考えてしまいます。きつと、私は押しつけがましくて、Kさんは「Tさんと一緒にいきたい」という気持ちで「行くぞ！」に込めているからなのかもしれないと思いました。

そんなこんなで、私は出掛ける前にもうクタクタなのですが、下宿人たちは直前の大騒ぎを忘れ去り、意気揚々と車に乗り込むのが毎回のことでした。日常的に出掛けたのは芝生のある公園でした。

ここでなら、車の心配もないし、少々の転倒なら草のクッションがあるので痛くない。「どぞぞ、どぞぞ気が済むまで楽しんでください」という気持ちで芝生に腰を下ろす私をしり目に、三人ともに見事に別方向に歩き出します。そのころいたスツプが、それぞれ見守り介助でつかず離れず。

Sさんは、コロちゃん

んの首にひもを結わえてお散歩。Kさんは、歩くというよりは小走りに一心不乱に前進します。Tさんはといえ

ば、芝生をのぞき込むようにしてゆっくり歩いていきます。下宿にいる時は結構に一人の格好いい独立

独歩。食事にしましょう！と私が叫ぶまで自由行動。草の香りと一緒に頬張るおにぎりの何ておいしかったことか。今思

う、帰りません宣言」をします。その宣

いっつし「よ」とい

う、「帰りません宣言」をします。その宣

言が出るたびに、「ああ帰りたくないくらい楽しんでくれたんだ。次も、本人が何

と言おうと外に連れ出そう」と、私

は決心するの

でした。

え傾向あり。そんな二人は幾つになっても、「どこって、N町に決ま

つて、N町に決ま

つて、N町に決ま

つて、N町に決ま

つて、N町に決ま

# 花畑屋繁盛記

連載 9

## 人と人がつながって



NPO法人在宅生活支援 サービスホーム花畑

木村美和子理事長

んMさんが下宿人として、姉妹は手に手を取り、玄関に向かいました。二人の故郷に胸がジーンとなつて、立ちすくむ私の耳に入ってきたのはこんな

「今日は出張だから大丈夫ですよ」と話す十一歳のMさんは、六と「そうだったか」と人きようだいの長女。納得してくるのです

「やっぱりやめた。オラここにいる」

まさか、まさかのTさんの心変わり。私は驚きのあまり、出かけた涙も引込んだし

「何で行かないんだ？」

「オラの家はここだから、行かない！」

しばらく無言で考えていたMさん。

「それなら私もここにいます」とあっさり撤回。

Tさんの気持ち嬉しいやら、Mさんの気持ちを思うと切ないやらで、一度は引込んだ

涙が再びあふれ出しました。

それから三年後、九十四歳になったMさんと八十一歳になったT

さんとともにN町に行つてきました。二人が帰ろうと言っていた町

は、海辺の穏やかな町でした。懐かしさのい

つぱい詰まった町でした。



仁木の果樹園で。花畑は「お出かけ、をずっと大事にし、遠くは神恵内、鷗川にも

### 4人目の下宿人登場

お開きという時、Tさんは

「私は帰らないよ。みんな勝手に帰ったからって、Tさんのお姉さ